慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	<南>から発信される農業：南伊豆への移住者の実践
Sub Title	Agriculture sent from south: practice of migrants to Minami-Izu
Author	宮坂, 清(Miyasaka, Kiyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2012
Jtitle	哲學 No.128 (2012. 3) ,p.285- 312
JaLC DOI	
Abstract	This paper deals with the relationship between tourism and agriculture by case studies of migrants to Minami-Izu. In Anthropology of tourism, there has been less studies of domestic migration from urban to country area in Japan though there are many cases. Minami-Izu, Shizuoka prefecture have been known as a major tourist site from 1960s which is represented as warm and rich nature by the mass media and tourist agencies. The local farmers who had been almost self-suffcient in food also entered into tourism by running direct sales shop or pick-your-own farm shop. Though they are declining these days, it is remarkable that the local community encourages migration from urban areas and engagement in agriculture. The Community attracts people by ways such as creating youth employment, researching development of organic farming and networking farmers, or mediating urban market and local farmers. There are migrant farmers in Minami-Izu, who share value of sustainable farming which is characterlized by organic without agricultural chemicals and rooted in local nature and community. They seem to enjoy life there despite many adverse conditions as they see the value worthwhile. To locate domestic migration from urban to country area in the study of tourism, the dualistic frame of urban and country should be treated as more fluid and interactive by mediaters of locals and migrants.
Notes	特集：社会学 社会心理学 文化人類学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000128-0285

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

〈南〉から発信される農業

――南伊豆への移住者の実践――

宮　坂　　清*

Agriculture Sent from South: Practice of Migrants to Minami-Izu

Kiyoshi Miyasaka

This paper deals with the relationship between tourism and agriculture by case studies of migrants to Minami-Izu. In Anthropology of tourism, there has been less studies of domestic migration from urban to country area in Japan though there are many cases.

Minami-Izu, Shizuoka prefecture have been known as a major tourist site from 1960s which is represented as warm and rich nature by the mass media and tourist agencies. The local farmers who had been almost self-sufficient in food also entered into tourism by running direct sales shop or pick-your-own farm shop. Though they are declining these days, it is remarkable that the local community encourages migration from urban areas and engagement in agriculture. The Community attracts people by ways such as creating youth employment, researching development of organic farming and networking farmers, or mediating urban market and local farmers.

There are migrant farmers in Minami-Izu, who share value of sustainable farming which is characterlized by organic without

* 慶應義塾大学非常勤講師

agricultural chemicals and rooted in local nature and community. They seem to enjoy life there despite many adverse conditions as they see the value worthwhile. To locate domestic migration from urban to country area in the study of tourism, the dualistic frame of urban and country should be treated as more fluid and interactive by mediaters of locals and migrants.

I. はじめに

現代社会において，都市から地方への観光や移住と，当該地域における農業の関係とはいかなるものだろうか．筆者は以前，南伊豆地域に移住しその自然を表象するアーティストらについて報告を行ったが［宮坂2008］，その調査の過程で，移住者には畑で野菜を栽培するなど農を実践する人が多いことがわかってきた．移住者は一般に，南国的な自然のなかでの生活やそうした生活を好む者同士のネットワークを求めて移住しており，たとえば上記報告で取りあげた人たちも，互いに採れた作物や情報の交換をしながら，程度の差はあれ，野菜を栽培し山菜を採集しそれを食べて暮らしている．自分が食べる食物を自ら育てること，採集すること，それ自体を喜びとしており，そうした営みが彼らの創造活動にも大きく寄与しているのである．こうした，南伊豆への移住者ネットワークにみられる価値観をおおまかにスピリチュアリティ文化，ないし都市的な生活のオルタナティブとまとめることができる．そして，この移住者ネットワークのなかに，主として農業により生計を立てている者もみつけることができる．

都市生活に慣れた者が地方に移住し就農するのは困難と思われるが，そもそも「田舎暮らし」「自然暮らし」のような巷に溢れるコピーが喚起するイメージの典型は，里山に囲まれた田園景観にひろがる農的な暮らしであろう．そう考えれば，地域の側が，農的な暮らしを観光資源とし，たとえ容易でないにしても，それを目的とした移住を促すことは容易に想像で

きる．どこまでも続く畑，美しい棚田といった「懐かしい風景」をイメージの中枢に据えるのが現代のグリーン・ツーリズムであり［鹿取 2003: 54］，その延長線上に，広義の移住促進政策，すなわち「交流居住」（総務省の施策）[1] や「二地域居住」（国土交通省の施策）を位置づけることができるだろう．都市が地方に注ぐ「ロマン主義的まなざし」を，過疎化・高齢化により衰退する地方農業を活性化させる方途とするのがこれらの施策の目的のひとつであり，南伊豆町でも，国や県の後押しにより，移住促進の施策が目立ってきている．だが，メディアや政策により注目される一方で，このような，地域社会と農を目的とした移住者を扱った，人類学や社会学の研究はこれまでほとんど存在しない．というより，そもそも今日の日本に定着したかにみえる地方への移住，いわゆる「Iターン」に関しても，正面から分析されることがなかった．それは菅が指摘するように，人類学や社会学が対象とする観光（ツーリズム）と移民（マイグレーション）は，いずれも「定住」という同じ基盤に立っているが，Iターン移住はその基盤から逸脱するものであるためだろう［菅 1998: 172］．Iターン移住は，定住／旅，日常／非日常，ゲスト／ホストといった，この分野で前提とされている二元的な枠組みの再考を促す現象なのである．

こうした事情を鑑みると，地方へ移住し農業を営む事例を紹介し検討することは，この分野における新たな領域を切り開くことにつながる．以上から本稿では，南伊豆地域における観光と農業の関係を整理したうえで，こうした，主たる生業として農業を選択した人たちと，彼らに関わりの深い地域の人たちを対象に重ねてきた聞き取りデータを紹介し，観光や移住と農業の関係を探る．

II.　観光業と農業の互恵関係

1.　空間イメージの形成と農業

南伊豆は天城山をはじめとした山がちな伊豆半島の南端に位置してお

写真 1　南伊豆亜熱帯公園

り，陸上交通の便が極めて悪く，かつては，訪れることができるのは限られたごく観光客だけだった．しかし，1961 年（昭和 36 年）の伊豆急行線の開通を機に状況は一変し，名だたる景勝地に観光客が押し寄せた．石廊崎や奥石廊など南伊豆を代表する荒々しい海岸景観に，その後の過程で付加されていったのが，暖かく異国情緒ただよう「南国の自然景観」だった．そのイメージ付加に大きく寄与したのが川端康成の『伊豆の踊子』である．「暖かい南国で身も心も癒される」ことを求めて，多く観光客が南伊豆を訪れるようになった［宮坂 2008: 176–177］．南国的な自然景観を演出するテーマパーク的な施設が次々とつくられていったが，なかでも代表的な「石廊崎ジャングルパーク」は，1969 年（昭和 44 年），石廊崎近くに開園し，1973 年（昭和 48 年）に入場者のピークを迎えた（その後入場者が激減し，2003 年（平成 15 年）に閉園した）．その他に現在も，「下賀茂熱帯植物園」（1962 年開園），「南伊豆亜熱帯公園」（旧静岡県農業試験場南伊豆分場），「南伊豆アロエセンター」（1982 年開園）などがある．これらの施設に共通した演出テーマは，「南国の自然景観」である．

「南国」を強調するため，この地方には本来ない「熱帯」の植物を持ちこんで植えさえし，南国の自然景観を演出する[2].

南伊豆観光は一時期大いに活況を呈したが，1980年代以降は観光施設の老朽化や制度的な疲弊により，徐々に観光客が減少していった．加えて，地域の人口流出と高齢化が加速度的に進行し，地域社会の活気は奪われていった．そして後にみるように，観光化はこのころまでに，地域社会における共同性や生業のあり方を，大きく変容させていた．ただし現在もやはり，南国的な自然景観が南伊豆観光において重要な役割を果たしていることに変わりはない．現在も町内にある観光施設の多くが，南国的な植物や，他地域よりも早く成長した植物を観賞するものであることがこれを示している．代表例として，1990年代に青野川の土手に，他種よりも開花の早い河津桜と菜の花が植えられ，また町の中心部への入口に菜の花の畑がつくられ，1999年（平成11年）以降，毎年2月に「みなみの桜と菜の花まつり」が行われている．厳寒期に桜と菜の花が楽しめるとあって，多くの観光客で賑わう．昨今の傾向は，テーマパークのように「囲う」施設ではなく，このような周囲の自然に「開放する」景観である．

以上のような南伊豆の空間イメージ形成を受けて，観光業と農業を互恵的に結びつけようと，さまざまな試みがなされてきた．その代表は「農産物直売所」や「観光農園」である．「農産物直売所」は観光ルート上に配された店舗で新鮮なその土地の野菜や果物を販売するものであり，今日の「道の駅」はこれが制度化されたものである．「観光農園」は，さらに踏み込んで，観光客を農園に入れ，イチゴ，アロエ，メロンなど，農作物「狩り」を体験してもらい，その体験と収穫物を販売するものである．体験を求める観光客と，収穫の手間が省けかつ収入にもなる農家，どちらにとってもメリットとなるため，町内にはいくつもの観光農園がある．同様の発想を展開させたものとして近年脚光を浴びているのが，いわゆる農園の「オーナー制度」である．都会の人びとが，例えば棚田のオーナーになり，

写真２　体験農園の募集ポスター

稲の成長に合わせて棚田を訪れ，代掻き，田植え，草取り，刈り取りなど，農作業を行うというシステムをつくるもので，景観保全の手段としても注目されている．南伊豆町の北西部に隣接する松崎町の「石部棚田」が成功例として知られる．南伊豆町でも 2010 年より，気軽に農業を体験できる施設として，吉祥地区に「町営吉祥体験農園」が開かれた．主として町民が対象であるとみられるが，これも耕作放棄地を転用したもので，同種の発想とみることができる．

2.　地域農業の選択―「百姓」，観光農園，そして移住促進へ

南伊豆の観光業によって演出された「南国の自然景観」イメージは農業と親和性が高く，観光業の領域に農業者が参入するケースがしばしばみら

れる．次に，同地域の農業を中心とした現状と，そこに至る経緯，そして展望について概観する．

筆者は2003年より2010年まで南伊豆町を歩いてきたが，耕作されていない農地，さらには放棄されてから長期間経過し荒地と化した元農地をたくさん目にした．青野川沿いの平地である加納地区や下賀茂地区には田畑が広がっているものの，山間地に入り勾配がきつくなるほど，一枚あたりの面積が少なくなるほど，田畑は放棄される傾向にある．山間に分け入ると，草木が生い茂っているところがかつて田畑であったことに気づくことがしばしばある．そこで見上げると，谷間を切り開いて地面を階段状にし，石を積み，水を引いた，猫の額ほどのかつての田や畑の跡が連なっているのがわかるのである．さらに山奥に入ると，かつての炭焼き窯の跡が半ば朽ち果てているのを見つけることがある．一時盛んだった薪炭づくりは，昭和30年代前半に石油燃料が普及するにしたがって急速に衰退したという．また，等間隔に植えられ，伐採期を過ぎた杉がひしめき合っている山林や，勢い余って山肌から平地にまで下りて繁茂している竹林も珍しくない．かつてごくありふれていたであろう，人の営みと自然が密接に関わりあいながら景観を形作っているのを見ることができるのは一部であり，その他は人との関わりを失った「自然」にかえりつつある．こうした状況について地域の人に話を聞くと，高齢化と過疎化による農業の担い手の減少によって農地が荒廃しているという，なかば定型化した説明がなされる．程度の差はあれ日本の多くの地域で起きているのと同じ事態が，南伊豆でも確実に進行している．

町が発行している『南伊豆町町勢要覧 資料編』(2010) からこれをみてみよう．農地分布をみると，その大部分が北西部の蛇石地区を起点として南東に流れ下り海に注ぐ青野川とその支流の流域にあることがわかる．青野川（二級河川）は本流が17,200 m，支流6本が計13,930 mあり，その下流域には同地域には珍しい田園が広がるものの，上流のとくに支流域

写真 3　柑橘畑

は小河川の谷底・谷頭の狭小な田畑と，谷沿い山腹斜面の畑や果樹園ばかりとなる．南伊豆町の行政面積 11,059 ha のうち，農地は 8.7%（663.1 ha, うち田 412.1 ha, 畑 548.7 ha）であるが，ある推計によれば，田のうち，実際に稲が栽培されているのは 70 ha 程度，つまり 1/6 に過ぎない［湯の花 2007］.

谷頭まで種々の作物が植えられていた当時の生活はどのようなものだったのだろうか．尾留川正平・山本正三らは，下田市と南伊豆町の沿岸集落を対象にした生態や景観に関する報告のなかで，その特徴を次のようにまとめている．当地域は，戦後に至っても交通の不便さのため開発の手の伸びない「半農半漁」の生活を営んでいた．そこは共同体的な組織を基礎として，集落の周囲の海域から山域までの多様な環境資源を利用し組み合わせるという，生産性の低い比較的同質な農漁家からなりたっていた［尾留川・山本編 1978］.

この地方の商業的な農業は養蚕から始まっている．明治時代より前から蚕種生産や養蚕は行われていたが，明治中期から工業化が進み現町内の村々に製糸工場が建てられ，大正末期から昭和初期にかけて最盛期を迎え

た．ただしその多くは零細な副業の域を出ず，昭和恐慌と第二次世界大戦を経て完全に消滅した．また，明治時代から畜産や野菜の抑制栽培も始められており，特に冬季の温暖な気候を利用した絹さやエンドウの栽培は，昭和初期より養蚕に代わって広く農家に導入された．さらに同時期より薪炭の生産が冬季の現金収入をもたらし，賀茂郡における木炭生産は1950年（昭和25年）には140万俵に達したが，石油エネルギーへの転換により1962年（昭和37年）には半減した．

商業的農業は現金収入をもたらしたが額は限られており，各戸は余力があればできる限り自給水田を確保しようとした．斜面の多い地形のため，10aが平均で50〜60筆にも細分され，形態も不規則であり，生産性は著しく低かった．海から離れた山間の集落においては，谷底の比較的平坦な土地に開かれた田から，緩斜面の畑地，樹園地，さらに斜面のきつい山地での薪炭，竹材の採取というように，くまなく環境資源が利用されていた．これら山域資源の一部は村の共有資源であり共同組織による生産活動に供され，各戸独自の生産活動は共同体的な規制により制限されていた．こうした事情から，各戸は季節ごとの多様な生産活動を競合しないように組み合わせることとなり，必然的に生活のリズムは互いに酷似していた．

共同的な自給農業を基盤にし，可能な範囲で商業的農業に手を広げるという生業のあり方を一変させたのが，1961年に開通した伊豆急行だった．都市から押し寄せる観光客を前に，商品作物の生産に専念する，観光業に賃金労働の機会を得てそちらへの依存を強める，民宿経営に力を注ぐ，といった道の選択を余儀なくされ，結果的に自給農業が等閑視され，それに伴い従来あった共同体の紐帯は急速に弱まっていった．商品作物の生産に専念する道を選択した農家の活路は観光との関係のなかに見いだされ，たとえば大瀬など，観光ルート上の集落に「観光農園」が出現し始めた［ibid, 田林 1976］．

南伊豆の観光農園は1960年代の観光ラッシュによって急発展したが，

その端緒はすでに大正期に存在していた．温室を利用した花卉栽培である．1925 年（大正 14 年）から 26 年の年末年始を南伊豆で過ごした川端康成は，下賀茂の温室花卉栽培について以下のように述べている．「有名な温室を見物する．広いには広いがカアネエションのような石竹科の草花ばかりだ．蕾が少しずつ開き初めている」［川端 1981: 44］．1919 年（大正 8 年），下賀茂で温泉熱利用のカーネーション栽培が始まったが，その数年後にはすでに「有名」な観光名所になっていた．他に，マーガレット，スイートピー，アイリス，グラジオラス，バラ，ブドウ，アロエなども栽培されており，農園の一部は観光客に開放されていた．昭和初期に下賀茂を訪れた幸田露伴は，「湯の村や　二月中旬瓜つくり」と詠んでおり，冬季にウリが栽培されていたこともわかる．今日まで続くメロン栽培も古くから行われていたものだ．1931 年（昭和 6 年）に安藤廣が下賀茂の温泉熱利用の温室でメロンの年 4 回栽培に成功したのが最初で，現在も同様の温室がいくつもある．こうした温泉を利用した下賀茂の温室が南伊豆における観光農園のはしりだが，これが有名になったのは，南伊豆の「南国の暖かい自然」イメージと容易に重ね合わせられたためだろう．伊豆急の開通後，多数の観光客を迎えて，さらに幅広い観光農園が林立していく．1972～77 年には静岡県の「自然休養村事業」により，「一条たけの子村」や「川合野いちご村」が設立され，タケノコ，シイタケ，イチゴなどを「狩る」農園が現在まで存続している［南伊豆町町誌編纂委員会編 1995］．ただし，これらの観光農園は，一時の隆盛期を経て，南伊豆の観光が全体に衰微していくにしたがって，やはり往事の賑わいを失いつつある．

その後の新たな動きのひとつは，1990 年代に始まった．すでに述べたように，町の中心を流れる青野川の土手に河津桜と菜の花が植えられ，1999 年（平成 11 年）以降，毎年 2 月に「みなみの桜と菜の花まつり」が行われている．これは農家が観光業に参入するというより，地域観光の

写真4　道の駅下賀茂温泉 湯の花

活性化のために一肌脱いだというべきものである．すなわち，1992年（平成4年）「第一回元気な百姓祭」と称して休耕田に種を蒔いたのが最初で，1993年（平成5年）の第二回には青市地区の農地に菜の花の種をまき，1994年（平成6年）には町中心部への入口にあたる日野地区の広大な農地に菜の花を咲かせた．近年は，夏になると同じ農地にヒマワリを咲かせており，町のシンボルイメージとして定着しつつある．

また，静岡県の農業試験場跡地にあった農海産物直売所「湯の花」に代わり，2009年（平成21年）2月に「湯の花観光交流館」がオープンし，同年10月には国土交通省から「道の駅」に認定され，「道の駅 下賀茂温泉 湯の花」として再出発した．南伊豆町観光協会の案内所，地元アーティストのギャラリー「みいず」，足湯，手湯があり，広々とした「湯の花」の店内には，地元の農家約400軒の作物がならぶ．大規模店舗になってから売上も順調に伸びているという．

III. 地域の農林業者たちの実践

過疎化と高齢化に伴う農地の荒廃がより顕著になったのを受け，2000年代に入ってから，移住を促し移住者に農業を担ってもらおうという政策的な動きが活発になりつつある．静岡県の賀茂地域支援局が，総務省の「交流居住」政策の一環として，移住・交流居住を促進する政策を進めており，南伊豆町でも2007年に移住促進のための冊子『みなみへ行こう！』を発行するなど，移住を促す動きが目立っている．この冊子には，移住者の実例が掲載されているほか，移住にあたっての準備や手順などが，詳細に記述されている．移住者が8例紹介されているが，そのうち3例が就農者であり，町が移住者に就農を促していることがわかる．同様に，静岡県の交流居住PRサイトの南伊豆町のページにも，農業を始めるための心構えや手順が掲載されている[3]．

こうした県や町による移住促進，就農促進の政策を実践面で支えているのが，以下でみる，地域農林業の活性化に取り組む3人である．いずれも会社の経営者ないし社員だが，地域農林業全体が抱える問題に自ら関与し，地域農業についてのビジョンをもつ．それゆえ就農を目指す移住者にとっては，地域とのあいだを橋渡ししてくれる媒介者となる．

1. 合理的な経営により若者を雇用する

仲尾浩氏(51)は，主として林業・農業を営む「有限会社 愛美林」で社長を務めている．威風堂々，確信に満ちた表情と語り口が印象的である．南伊豆町出身（三島市生まれ）で，東京で学生時代を送った後に帰郷し，16年間農協(JA)に勤めたあと，1997年に南伊豆町で創業した．高度成長期に植えられた杉が伐採期を迎えたにもかかわらず放置されていることを知り，それを商機ととらえたことが契機だったという．2002年に法人化し，2009年現在，従業員約20名が，主に造林保育に携わっている．

写真5　愛美林の作業の様子

その多くは若者であり，積極的な経営を行っていることがわかる．

仲尾氏によれば，南伊豆の山林は所有区画が細かいためこれまで林業が発達せず，伐採はしても植樹せずに放置し，荒廃する傾向にあった．これを，競争力を維持しながらも，循環型の林業，持続可能な林業に転換させることを目指しているという．山の現場では，従業員の若者たちが大型の林業機械を用いて，作業道の開設や伐採の作業を手際よく行っている．仕事はきついが，仲尾氏は頼りになる存在だと笑顔で語る．仲尾氏は小中学校の森づくりに関するボランティア講座の講師として里山の大切さを説き，「NPO法人 伊豆農林水産活性化支援センター」の理事長を務めるなど，地域の農林業活性化の中心人物のひとりである．

移住者がその地域で農業に関わるためには，それを媒介する者が必要である．農地を借りるにも，土地の性質や気候の特色を知るにも，具体的な知識と技術が必要であり，それを獲得するには人から学びながら経験を蓄積するほかない．「愛美林」への「就職」は，それらを可能にする．仲尾氏の会社に就職したひとりは，同社の農業部門を務めたのち，独立して農

業専門の会社を設立している．中村大軌氏 (31) は埼玉県生まれで，聖学院大学を卒業後，2003 年に「愛美林」に就職した．人当たり穏やかだが気骨ある青年である．在学中から環境問題に関心をもっていたが，静岡県や南伊豆地域とは関わりがなく，同社に就職したのは「内定が一番早く出たから」だったという．当初は間伐や作業道開設に携わっていたが，やがて会社が農家から休耕田を借りて米作りを始めることになり，その作業を任された．2010 年に独立し「株式会社アグリビジネスリーディング」を設立した．中村氏をふくむ計 2 人で会社所有 9 ha と委託 1ha で米を栽培しているが，これは 1 つの農家・会社が営む規模としては，伊豆半島で最大という．規模を拡大することにより生産性をあげ経営を合理化するという方向性を打ち出しているものの，現段階では技術上の問題や人手不足により必ずしも軌道に乗っているわけではないが，仲尾氏のバックアップもあり，将来には自信をもっている．後述する石川氏や横田氏と同じように，彼は「有機・無（減）農薬」の農業に関心を寄せており，移住者ネットワークの協力を得て，稲の一部をそのように栽培する試みを始めている．

南伊豆からの人口流出の要因のひとつが就職難だが，いくらでもある手つかずの山林を活用し，林業を活性化することで，雇用が生まれ，若者が移住しそこに生活する基盤ができる．若者が生活するようになれば，たとえば中村氏のような新たな地域の担い手に成長していくのである．

2. 有機農技術を開発しネットワークをつくる

林業や農業において規模の拡大と作業の合理化をすすめるのがひとつの方向性だとすれば，「有機・無（減）農薬」という付加価値の開発に活路を見いだす方向性もある．

山本剛氏 (70) も，農林業界のキーパーソンのひとりである．南伊豆町北東部の山間，一条地区の山際をのぼっていくと，「みなみいず たけ炭ひろば」と手づくりの看板がかかっている．竹材や竹炭，柑橘類などを生

写真6　みなみいずたけ炭ひろば

産・販売する「ガイアシステム株式会社」を経営している．温かく気さくな人柄で，そのためか様々な訪問者がひっきりなしにある．訪問者があると，夏の暑い時期でも炉に炭火を起こし，それを囲みながら語る．火を生活から取り払ってしまうのは大きな間違いだと思うんだがなあ，などとゆったりとした口調でユニークな文明論を聞かせてくれる．

敷地内には大小の炭焼き窯がいくつもあり，竹炭の生産を行っている．農業を営んでいた父親の跡を継ぎ，さまざまな試行錯誤を経て現在に至っているという．すぐ近所には，タケノコ，オレンジ，栗，椎茸の収穫体験を仲介し，またそれらの販売を行う「一条竹の子村」があるが，この施設の発案・企画を行ったのも山本氏である．地域の農業・林業の活性化に力を注ぎ続けており，この例にみられるように，それらを観光業に接続する活動も行っている．

山本氏は南伊豆地域における有機農業の方法論的な先導者であり，特に竹・炭の研究家として知られ，専門誌『現代農業』（農文協）に寄稿するなどしている．なかでも，ぼかし肥（有機発酵肥料）に炭を5%混ぜ，

1〜2ヶ月かけて有用な菌を増やした「ガイア肥料」は評判がよく，「大地を守る会」（後述）から指定肥料とされるなどして広まり，マザーアースクラブ（後述）の菜の花栽培をはじめ，多くの農家で使用されている．山本氏は，後述する有機農業生産者団体「南伊豆太陽苑生産者グループ」の設立に大きく携わり，現在も生産者代表を務めている．昭和50年代に，生活協同組合の産直運動や食材宅配会社「大地を守る会」[4]の活動が始まったのを受け，それらに共鳴・連動するかたちで立ち上げたものである．当初の加盟農家は5軒ほどだったが，生産者に対して，都会ではこうすれば売れるよ，と勧め，結果として参加者が増えていったという．近代農法に対する疑問，健全な農作物への志向が強くある．

近年は竹の研究に熱心に取り組んでいる．同地域の竹林は放置される傾向が顕著で荒廃が進行しているが，山本氏はこれを活用するための研究と運動を行っている．放置竹林の再生，新たな利用に向けての方策を確立するとともに，新たな品種の導入，特にハチク，マダケ，シホウチクの増殖に取り組んでいる．多種を並行して育成することにより，タケノコが一年中食べられるようになるサイクルをつくることを目指しているという．これは棚田と同様のオーナー制導入により観光資源にすることを見据えたもので，山のオーナー自身が作業可能で収入が得られ，かつ山がよくなり生き甲斐にもなりうるという．山本氏はこれを実現するために県などに働きかけ，2006年に「南伊豆竹資源利用拡大検討委員会」を発足させ，「伊豆タケノコワールド」（仮称）の設立を目指している．この構想について山本氏は，「プロが少し手助けすれば自分たちでできるような循環をつくることが大切．杉は30年かかるが，竹だったらすぐ楽しめる．都会の人のパワーをもらい受けるようなシステムをめざす」という．

山本氏の眼目は，環境資源をくまなく使うかつての生活をそのまま蘇らせることというよりは，都会の人々にアピールする魅力的な循環システムを構築し彼らを招くこと，そしてそれにより山の荒廃を防ぎ，好適な生態

系を維持することにある．合理的な林業経営により若者の雇用を確保し山を維持しようとする先述の仲尾氏の実践とあわせ，農林業のキーパーソンの活動が，地域に溢れる自然資源と都市の力を結びつけることを目指していることがわかる．

3.　都市市場と農家を媒介する

大輪誠二氏 (50) は，東京から南伊豆への移住者であり，南伊豆地域の水産物と農作物の卸売業を営む「株式会社 南伊豆水産」に勤めている．日焼けした健康そうな笑顔が印象に残る．同社は「水産」会社であるものの，取扱商品の半分は農作物である．東京に暮らしていた現社長が，下田港の金目鯛漁船から水揚げされた魚を，東京の市場で販売したのが会社の始まりという．水産物の引き売りを通じて生協とつながりができ，やがて柑橘類の卸しも行うようになり，1984 年，地元の農家に声をかけ，前述の山本氏を生産者代表として，有機農法で無農薬ないし減農薬で生産を行う「南伊豆太陽苑生産者グループ」を設立した．

無農薬（減農薬）や有機という選択をしたのは，第一に商品の差別化によりブランド力をつけるため，第二に会社として環境や健康への配慮を志向したためという．とくに「大地を守る会」との関係は，質量ともに大きい．どの農薬を何回使ったかなど細かい情報を報告する必要があるため事務手続きの効率はよくないが，大輪氏やこの会社の考え方と一致しており，会社経営のあり方にも大きく影響しているという．「減農薬や有機というようなこだわったものは規模の大きな生協からは扱えないと言われますし，農家に気づいてもらうにも時間がかかりますが，やってみると（農作物の）外見だけでみる人ばかりではないということがわかってもらえました」．当初は受け入れてもらえなかったものの，時間をかけて説得し，「手間をかけておいしく安全な農作物をつくれば，売れる」ということを地域の農家に納得させたのである．また，南伊豆町の「みなみの桜と菜の

花まつり」により，菜の花は気候の温暖さを示すシンボルのひとつになりつつあるが，南伊豆における食用菜花の栽培は20年ほど前に同社が始めたもので，「まつり」の立ち上げにも協力し，廃田の草刈りをして菜の花を植えたのだという．

昨今の問題は生産者の高齢化と減少である．南伊豆太陽苑は当初より規模が大きくなってはいるものの，近年は高齢化がすすんで縮小し，2009年の登録農家は30軒ほどである．近年は後継者が育たず，都会からの移住者がチャレンジすることもあるが，なかなか続かないという．「都会からやりたくて来る人もいますが続かないですね．考えが甘く，厳しさを知ると引いていきます．2年がんばったけど3年目にはいない，とかね．計算どおりにいきません．今年は日照りですし，台風シーズンに落果したり傷がついたりすることもありますし，毎年，こんな年はなかったねというかんじで，思ったような結果が出せないですから」．

大輪氏自身は，20代後半まで東京の企業で営業職を務めていたが，転勤の話を機に，子どものことを考えて会社をやめ，南伊豆に移住した．下田市で金目鯛の漁師を一年くらいやったが，やがてこの会社の社長に声をかけられて働くようになったという．「東京からきれいな海にひかれてやってきましたが，ほとんどの農家が化学肥料を使用していて雨が降るとそのまま川に流れ込み，貝や海老が「磯焼け」を起こしたり，海藻がだめになったりしていました．同じ地域に暮らしているわけだから，山の者は海のことを，海の者は山のことを考えるのが大切ではないかと思いました」．ここには，南伊豆を選んで移り住み，漁師を経験し，現在に至る過程をつうじて醸成された，大輪氏にとっての現在の仕事のもつ意義が，端的に語られている．つまり南伊豆の美しい海と豊かな山からなる自然に生きることが目的であり，そのマクロな生態系の回復に貢献するという，自身の仕事のもつ意義がそこから導き出される．自分の役目はコンピュータとインターネットを駆使して都会の「外貨」を地域に呼び込むことにある

ともいう．都市の市場と南伊豆の生産者の間に立ち，無農薬（減農薬）・有機栽培がもつ意味と価値を双方にアピールし，その価値を介して両者を結びつけるという方法を用いて，南伊豆暮らしをしているのである．

IV.　移住者の農業実践

1.　大規模経営と有機農業を両立させる

石川憲一氏 (59) は，町内の開けた谷地で「有限会社マザーアースクラブ」を経営している．野良仕事で日に焼けた精悍な体と，真摯な語り口が印象的だ．東京でジュエリーデザイナーをしていたが，バブル期の東京での仕事と生活に嫌気がさし，できるだけ人のいないところに行きたくて，1989 年に南伊豆にたどり着いたのだという．当初はジュエリーデザインの仕事をしつつ自家用に野菜を栽培していたが，やがて規模を拡大し専業の農家になり，やがて法人化した．食用の菜花を中心に，水稲，紅菜苔（こうさいたい），タケノコ，フキ，甘夏みかん，かぼちゃ，明日葉，ブ

写真 7　マザーアースクラブの畑

ルーベリーなどを栽培している．露地野菜 4 ha と水稲 2 ha を社員 3 人とパート 6 人で栽培しており，南伊豆地域で有数の規模である．

社名に「母なる大地」を掲げていることから察せられるように，大地を思いやる農業，持続可能な循環型の農業を目指している．自家製の堆肥など有機質の肥料を用い，農薬を使用しない，あるいは極力減らしているほか，例えば，農業機械の燃料を BDF（Bio Diesel Fuel, 食用油の廃油から作られたディーゼルオイル）に切り替えるなど，先駆的な試みを行っている．先述の「南伊豆太陽苑生産者グループ」のメンバーとして「大地を守る会」をとおして販売するほか，東京で行われるアースデイ・マーケット[5]などのイベントに参加するなど，積極的に都市に向けて発信している．また，新規就農の相談にのったり，先述の仲尾氏が理事長を務める「NPO 法人伊豆農林水産活性化支援センター」の観光・農業部会長を務めるなど，移住者でありながら地域農業の啓発と活性化に熱心に取り組んでいる．

石川氏は東京での生活に嫌気がさし，心機一転，新たな土地に移り，ジュエリーデザイナーから農業へという全くの異業種に参入している．農業を営むようになったのは「すべてなりゆき」だと石川氏はいうが，環境への配慮を第一に掲げる農業を営むようになったのは必然であるようだ．東京郊外で生まれた石川氏は，のどかな農村が住宅開発によって都市化していく過程を苦々しく思いながら育った．南伊豆は子どものころの家の周囲の風景，いわば原風景を想起させるものであり，これを同じように開発するのでなく，そのまま残したい，あるいはむしろ時代を遡りたい，そうした思いがあるという．東京での生活をやめて南伊豆に移住したことが大きな契機となり，それまでの生活のあり方そのものを問い直す方向に進んでいくことになったということだろう．石川氏の南伊豆での農業は，東京に象徴される，大地に根ざすことを忘却した現代社会に抗することを強く意識したものである．したがって，ときには環境への配慮をめぐり地元の

農家と対立することもある．自然あふれる南伊豆に生まれた人にとって自然が特に貴重なものでもありがたいものでもないというのはわかるが，自分は，そうした見方をする人が自然を容易に破壊することに疑問を抱き続けてきた，だから，言うべきことははっきり言うのだと，毅然と語る．

2. 「百姓」をめざす

横田淳平氏夫妻は，青野川沿いの加納地区に田と畑を借り「はぐくみ自然農園」を営んでいる．幼い娘さんを囲む，和やかな家庭の雰囲気が印象に残る．妻の裕美氏の祖父が南伊豆の出身で，自然が豊かだったことと下見にきたとき地元の人に親切にしてもらったことから移住を決め，空き家を斡旋してもらい，いくらか修繕し，暮らし始めた．2004年，移住にあわせて結婚している．

淳平氏(34)は東京農業大学卒業後，ニュージーランドにウーファー[6]として滞在しパーマカルチャー[7]を学び，帰国後，埼玉県小川町[8]で農業研修を受け，2年間，古民家再生の大工の修業も積んでいる．裕美氏は助産師

写真8　はぐくみ自然農園の畑

写真９　田に描かれたピースマーク

をしていたが，カナダでワーキング・ホリデー[9]をしているときにやはりパーマカルチャーと出会い，農業に関心を抱くようになった．ふたりはある農業研修で知り合っている．

淳平氏は大学時代から農業に関わり続け，農業をする場所を探してたどり着いたのが南伊豆だった．南伊豆のなかでは平地の多い，加納地区を選んでいる．移住することと農業を営むことが当初から一体だったため，班や消防団に入り，祭りでは簡単には叩けない太鼓も叩くなど，地元に積極的に溶けこんでいる．

経歴からも察せられるとおり，ふたりには持続可能な農法へのこだわりがはっきりとある．緑肥を中心にした有機質の肥料を用いた露地野菜（葉もの，芋，茄子，大根，人参，オクラなど）栽培，南伊豆では初めてというアイガモ農法による水稲栽培を行い，農薬や化学肥料を一切使わない．

現在では田９反と畑６反で栽培しています．田は１年目には２反でしたが，注文が多くてどんどん広げ，現在９反まで増えましたが，

もうこれ以上は増やさないつもりです．少数のお金になる品目を集中して栽培すると設備投資が必要になりますが，それはなるべくしたくありません．米だけではなく野菜も，雑穀もありますよ，というようにしたいんです．果樹園をやってその下で鶏を放し飼いするとか，そういうことをやれる場所を探しています．多品目を少しずつ栽培する百姓になりたいですね．

ここで言及されている「百姓」とは，かつての南伊豆にたくさんいたはずの人々のことであり，同時に専門化・専業化が進む現代社会において，それに抗して，生業や農作物の多様性を担う者のことである．むろんかつての百姓の再現を目指すというより，現代の諸条件において可能な，自給自足的な百姓を基盤に，そのかたちを崩さなくて済む程度まで規模を拡大するという方向性のことである．石油系の資材は極力使わないというが，必要であれば農業機械は使用する．自身が食べるものをつくるという範囲を極端に逸脱しないように自制することが肝心だ．販売の仕方もまた示唆的である．「湯の花」など地域内の販売が1～2割で，残りは自身のウェブサイトで注文をとり自身で発送する分が占めるが，固定客が増えていき，現在ではほとんどが固定客で占められているという．これはインターネットによって可能になった，対面ではないが対面性の強い売買である．横田氏のつくるものを食べたいという人が，直接，横田氏に申込み，横田氏から発送されるのである．

IV．〈南〉からの発信―移住者と地域の挑戦

今日，南伊豆で農業を営むということは容易ではない．平地の少ない中山間地のため大規模化が難しく，台風の影響を受けやすく，大都市圏にそれほど近いわけでもない．また，現代日本のマクロな社会環境のなかで南伊豆という地域やそこでの農業がおかれている，構造的な劣位を引き受け

ることにもなる．経営の成立を第一とする場合，南伊豆に移住し農業という生業を選択することは，諸条件から判断して，必ずしも適切ではない．だが，移住して就農した石川氏や横田氏は，よそ者にはさらに大きいはずのこうした困難を受け止めつつも，創意工夫をこらすことで，むしろ活き活きと楽しんでいるようにみえる．その「やりがい」となっているのが，彼らが南伊豆での農業においている価値である．彼らのように南伊豆の自然環境のなかで持続可能な農法により健全な野菜をつくりながら生活することに価値を見いだすのであれば，経営はほどほどだとしても，南伊豆での就農には大いに魅力と可能性がある．その価値は彼らを満足させ，さらに彼らによって育てられた作物の「付加価値」ともなり，それを食べる人を満足させる．この価値は南伊豆の地域農業の可能性になりうる．

石川氏や横田氏がつくる，彼らの価値が込められた農作物は，社会的にみれば「対抗文化」のメディアである．その農業は主として東京を中心とする関東の都市圏に向けて発信されるが，その都市民のうち，彼らが育てた作物を食べているのは，産地と生産者の顔，栽培方法の持続可能性，それらから導かれる健全なおいしさから，食を選択する層である．つまり彼らが育てるのは，都市市場の需要に基づき地方から供給される匿名性の高い作物ではなく，ユニークな産地のユニークな生産者が都市のユニークな消費者に向けて発信するユニークな作物である．南伊豆の自然と社会に根ざし，その自然に無理のないかたちで働きかけられ，丹精込められて育ったものであることにより，その作物は，それに丹精込めた生産者の表現となり，都市文化に対抗する南伊豆地方文化のメディアとなる．そのユニークさゆえに，その作物，そしてそれが体現する文化は，都市による地方産地の支配様式としての「産地ブランド」に容易に回収されない強さをもつ．彼らの作物は，商品の均質性を担保しつつ差異化（＝ブランディング）によって駆動し続ける巨大な都市市場へのアンチテーゼなのである．この文化は，都市を意識しつつ都市に対抗する地方の文化であり，都市—

地方という，現代日本社会に埋め込まれたマクロな支配構造を少しずつずらず運動である．

また，農業を営む彼らは移住者のなかでも際だって地域社会との関わりが深く，石川氏が経験しているような価値観の相違にともなう葛藤を伴いながらも，地域の人々からすでに地域社会の担い手としての役割を期待され，地域の未来を託されている観すらある．こうしたことから，Ｉターン移住を考える場合，都市／地方という（グリーン・）ツーリズム分析の枠組みから出発して，それをより流動的に捉え直していく必要があるといえるだろう．つまり「ツーリズム現象の各段階における政治過程では，都市発信の高邁な思想や意識が逆転されたり流用されたりしながら地元の生活者がヘゲモニーをにぎるのである．都市の論理をベースに都市民が主体となったグリーン・ツーリズムを，論理形式はそのままにして地域に有用な中身に変えていく過程こそは，生活知の巧緻な発露であった」［松田，古川 2003: 212］というとき，「定住地」や「生活の場」という点から都市民と地方（地域，地元）民を分ける構図が前提となっているが，南伊豆へのＩターン移住者，なかでも就農者の場合，都市から来たよそ者でありながら一方で紛れもない「地元の生活者」であり，地元民と同様，都市の論理との関係のなかで生活知を発露する主体である．都市の論理と地元の生活知は，移住者を介して交錯する．また逆に，石川氏や横田氏がもつような都市への対抗的な価値とそれに基づく農業が，よそ者，移住者だけのものでないことは，たとえば山本氏の実践をみれば明らかである．「南伊豆太陽苑生産者グループ」は南伊豆における有機・無（減）農薬農業の先駆的存在だが，当初，山本氏や大輪氏は地元の農家を「都会ではこうすれば売れる」と説得している．都市由来の，都市への対抗的な価値に支えられた「大地を守る会」の活動を，農家の生活のためのものとして戦術的に言い換えたのである．その山本氏自身は，身体の不定愁訴を改善するため友人から紹介された七号食[10]を試し，その効果に驚いたことを契機に有機農

業の道に進んだ人物である．山本氏において，都市への対抗的な価値と地元の生活者の論理が交錯し共存している．ここに端的に表れているように，南伊豆の地域社会の可能性は，メディアや観光客から注がれるまなざしを戦術的に流用することで身につけた，外来の目新しい試みを受け止め，見極め，交渉し，共に道を切り開いていく柔軟性を持ち合わせている点にあるといえるだろう．

付　記

調査にあたっては，本稿で取りあげさせていただいた方々，その他，南伊豆在住のたくさんの方々のお世話になった．ここに謝意を表したい．

註

[1] 都会に居住する人たちが，都会と田舎の両方に滞在・居住する場所をもち，仕事，余暇，趣味，学習など多様な目的において使い分け，田舎では地元の人たちと交流をする生活スタイルを指す．総務省による施策の一つで，短期滞在型，長期滞在型，ほぼ定住型，往来型，研修・田舎支援型に分けられている．

[2] 同町加納には「東京大学大学院農学生命科学研究科附属科学の森教育研究センター樹芸研究所」（1943 年開所）があり，また石廊崎そばにはかつて「静岡県農業試験場南伊豆分場」がおかれるなど，温暖な気候を利用した植物や農業の研究が盛んな地域でもある．

[3] 静岡県サイト：http://www.pref.shizuoka.jp/soumu/so-810/koryukyoju/ikiru/hataraku.html

[4] 千葉市に本社をおく「株式会社 大地を守る会」．1977 年に設立．2011 年現在，宅配会員約 92,000 人，生産者会員約 2,500 人．宅配エリアは関東の都市部（東京，千葉，茨城，神奈川，埼玉（一部を除く））．自然共生型の農業，安全な食を目指し，有機・無（減）農薬で栽培された野菜などを積極的に扱うことで知られる．http://www.daichi.or.jp/

[5] 東京都心および近郊の公園などで不定期に開催される，主として農家・生産者が直接販売を行うマーケット．自然志向，環境志向が強く，有機農業についてのワークショップが開かれ，独自の地域通貨を流通させるなどしている．

[6] ウーフ (WWOOF, Willing Workers On Organic Farms) のシステムを利用して働く人のこと．ウーフは，金銭のやりとりせずに「農業労働力」と「食事・宿泊場所」を交換する仕組みで，国ごとに設置される事務局を介して，有機農業を営む「ホスト」と労働力を提供する「ウーファー」を結ぶ．1971 年イギリスで始まり，オーストラリア，ニュージーランドで発展，日本でも 1994 年に始まるなど，20 か国以上に広がっている．ウーフ・ジャパン：http://www.

wwoofjapan.com

[7] パーマカルチャー(Permaculture)は，Permanent Agriculture（永続する農法），Permanent Culture（永続する文化）からの造語.

[8] 埼玉県比企郡小川町．有機・無農薬（減農薬）農業が盛んな町として知られる.

[9] ワーキング・ホリデー(Working Holiday)とは，二国間の協定に基づき，青年が外国で休暇を楽しみながら，滞在資金を補うために就労することを認める査証及び出入国管理上の制度．日本と協定を結んでいるのは，ニュージーランド，オーストラリア，カナダなど11カ国．外務省：http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/visa/working_h.html

[10] 玄米のみをよく噛んで食べる健康法．不定愁訴軽減やダイエットの効果があるとされる.

参照文献

尾留川正平，山本正三（編），1978,『沿岸集落の生態』二宮書店.

鹿取悦子，2003,「農山村社会の再編とグリーン・ツーリズムの可能性―京都府美山町の観光農園・江和ランドの取り組みから」古川彰，松田素二（編），『観光と環境の社会学』新曜社，53–78.

賀茂郡教育研究会編，1957,『新南豆風土誌』賀茂郡教育研究会.

川端康成，1981,『伊豆の旅』中央公論社.

菅　康弘，1998,「交わることと混じること―地域活性化と移り住む者」間場寿一（編）『地方文化の社会学』世界思想社，150–175.

田林　明，1976,「観光地化に伴う沿岸集落の変貌―南伊豆・石廊崎の事例」『経済地理学年報』22巻1号，1–19.

松田素二，古川　彰，2003,「観光と環境の社会理論」古川　彰，松田素二（編），『観光と環境の社会学』新曜社，211–245.

南伊豆町，2009,『広報みなみいず』平成21年3月号.

南伊豆町，2010,『南伊豆町町勢要覧 資料編 平成22年』南伊豆町.

南伊豆町町誌編纂委員会編，1995,『南伊豆町誌』南伊豆町町誌編纂委員会.

宮坂　清，2008,「観光と自然表象―南伊豆への移住者を事例として」『哲学』第119集，三田哲学会.

山下晋司，1996,「〈南〉へ―バリ観光のなかの日本人」『岩波講座文化人類学7・移動の民族誌』岩波書店，35–59.

湯の花，2007,『湯の花通信』2007年11月号.

参考 URL（2011 年 10 月 14 日に閲覧済み）

南伊豆町　http://www.town.minamiizu.shizuoka.jp/
スローライフ・スローフード・シズオカ（静岡県サイト内）http://www.pref.shizuoka.jp/sangyou/sa-310/slowlife/
伊豆南有機ネット（伊豆南地域有機農業推進協議会）http://www.izu-yuuki.com/
マザーアースクラブ http://www.motherearthclub.com/
はぐくみ自然農園 http://www.hagukumi-farm.com/
みなみいず たけ炭ひろば http://www.izu-gaia.com